

文部時報

昭和五十六年一月
第一二四四号

特集 我が国の文教の現状と課題

昭和五十六年

年頭の所感

文部大臣 田中 龍夫……4

▽新春てい談

これからの教育——世界の中の日本——

8

(出席者) 川上 正光・江藤 淳・△司会▽宮野 禮一

私の見る我が国の文教の姿

初等中等教育	奥田 真文……20
高等教育	天野 郁夫……26
学術研究	手塚 晃……33
社会教育	山本 恒夫……39
体育・スポーツ	島崎 仁……45
芸術文化	内村 直也……52

▽資料

統計に見る我が国の文教の現状

大臣官房調査統計課……60

随 想

亡き母の遠きことども

小倉 遊亀……58

連載第4回

国民生活とエネルギー

高エネルギー物質の光化学的生成

田中 郁三……88

生涯教育について

高村 象平……69

●文部省のまど

「青少年の徳性と社会教育」

(中間まとめ)……社会教育局社会教育課75

文教施策連絡協議会

終わる……大臣官房企画室86

●昭和五十六年表紙絵入選者発表……95

絵 画 ●須田国太郎 歩む鷺

(岩崎吉一)

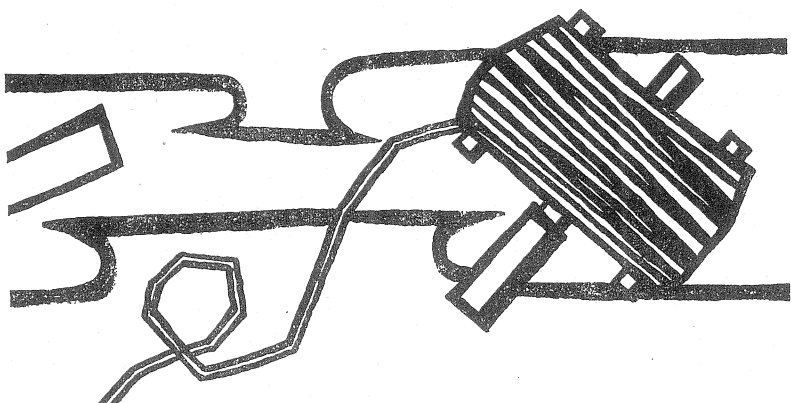
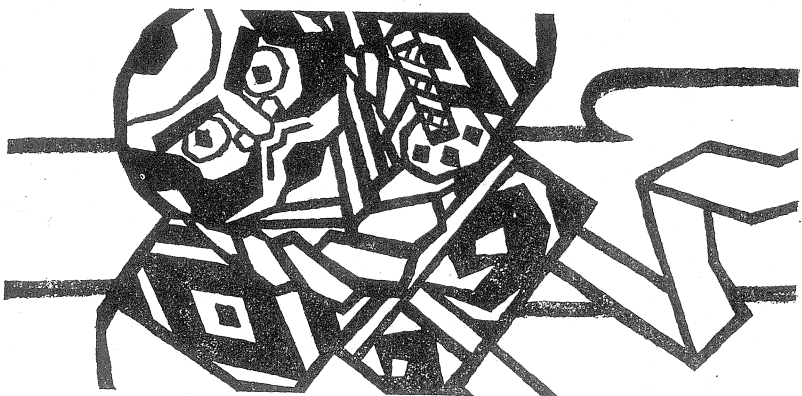
文化財 ●シーボルト妻子像螺鈿合子

(大塚英明)

■次号目次……32

初等教育資料目次・中等教育資料目次87

表紙 林美紀子 カット 内部敬生



の教育



長岡技術科学大学長
川上正光氏

大きい海外依存度

宮野(司会) これからの我が国の社会は国際化という方向に向かっているわけですが、本日は、こうした流れの中で、我が国のこれからの教育についてどのように考えていったら良いか、ということについてお話をいただきたいと思っています。いろいろな意味でいわゆる国際化ということが言われていますが、我が国が国際的に置かれている地位が非常に問題だらうと思います。特に

我が国の場合は、先進国の中でも特殊な地位にあって、食糧問題一つをとってみても、先進国の中で自給率が最低であるとか、石油ショック以来大きな問題となっているエネルギー資源がほとんどなくて、外国への依存度がこれまた最高であるといったように、経済的な基盤が非常に弱い面もあるわけですが、反面、日本人がここまで活躍しているのは、日本人のそれなりの強さというものがあるだろうと思います。そこでまず最初に、国際的に見て我が国はどうなっているのか、どのような観点からでも結構ですからお話を伺いたいと思います。国際関係におくわしい江藤先生からどうぞ。

江藤 私は、国際化せざるを得ない国というのは、何らかの意味での貧しさを持った国だと思っています。昔のギリシャを例にとると、国土は岩山が多く、オリブが少



〈司会〉
文部省大臣官房審議官
宮野禮一

これから

—世界の中の日本—



東京工業大学教授
江藤淳氏

しできるほかはこれといった農産物ができないとなると、国力の維持、向上を図るためにはどうしても海外に発展しなければならぬ。そこで地中海に出て行って、あちこちに植民地をつくって、それでやっていたところとした。もっと新しいところでは、オランダでもイギリスでもそうだと思いますが、大変に厳しい国内の環境が、人を海外に押し出し、国際的な広がりの中で生存しようという姿勢を育んでいったと思います。日本の場合は、ギリシャやイギリスほど貧しくはないんですね。国土

は小さいけれどイギリスよりは大きいし、食べ物も大変おいしく、四季が温暖である。従って、江戸時代のように、例えば人口を三千万人内外に抑えられれば、日本は自給自足でやっていくこともできた。

ところが、人口が一億以上になり、産業がこれだけ高度化したために、いま指摘されたような、現代的窮乏の条件が生じてきた。しかし、今日までのところは上手に対応してきた結果、豊かな社会を達成できたものですから、実は日本の基本的な生存条件は豊かさどころか大変に貧しく、国際的に平和が続いてきたからこそ、辛うじて今日の繁栄が達成されているのだ、という自覚が、国民の一人ひとりの間には必ずしも深くないように思います。

模倣に主力を注いできた科学技術

宮野 明治開国以後、日本が一番変わったのは、西欧の近代科学と接してそれを摂取したことだと思います。それが日本の近代社会の基礎になっているわけですが、例えば、工学部を当初から大学の正規の学部に取り入れた、当時の我が国の考え方は、西欧の大学に比べて、技術教育と言いますか、工学的なものを重視していたと言われています。これも我が国の適応の一つだったのでは

ないかと思いますが、その点も含めて、川上先生は、近代社会が開かれた後の我が国の科学の水準というものを、どのように評価しておられますか。

川上 明治以降、日本の大学制度は大体ドイツ風なもの为主として取り入れたと聞いています。学部制というものもヨーロッパ風なわけですが、工学部を取り入れたのはアメリカ的なんですね。このことが特に第二次大戦後の日本の経済成長には大変効果があったと私は思っています。

ただ、ある意味では日本も大変豊かな国になって結構な面もありますが、私はかなり悲観的にみている面があります。

それを申し上げる前に、我が国の教育の特質を私の立場で言わせていただくと、二つあるんじゃないかと思えます。一つは、知識を詰め込むこと。もう一つは教科書の中に模範的な問題の解き方を示して、その類題のいわゆる「解き屋」の訓練をしてきたこと、と私はみています。知識の詰め込みの方は、これまではこうだったという前例——これが大変うまくいっている例として官僚制度。類題の解き屋の訓練の方は日本の量産技術が成功していることに現われているように思えます。外国でやっていることをもう少し効率よく、安く、品質よくできないかというふうに思います。

いかということに力を置くやり方、これは正に類題を解くことなんです。

このように、模倣に主力を注いで近代化がうまくいった反面、自分で考える力というものを重視しなかった。一口で言えば独創力が欠けていると思う。それはどういうところに現われているかと言えば、技術面で世界に貢献するような優れた技術革新（イノベーション）という人もある。が極めて少ない。それから、研究者の知恵比べとも言うべきノーベル賞受賞者が極めて少ない。更に、OECDが指摘（昭和五十一年）しているように、日本の社会科学はほとんど模倣で独創的な研究成果はゼロに近い、といった手厳しい批判さえ受けている。

近代化を急いで、一面大変成功しているようではあるが、こういう点で、実は本当の考え出す力というものを、あまり重視しなかったんじゃないか、と思っています。

宮野 確かに量産技術が得意であるとか、模倣であって独創的ではない、というようなことも言われているわけですが、先進諸国に対する後れを取りもどすためには止むを得なかったんだ、とも言われているわけです。このへんはいかがでしょう。

江藤 私、一昨年の秋から一年足らずの間、アメリカに出張しておりましたが、一七、八年前の留学時代と比

べて、本当に今昔の感に堪えませんでした。一九六〇年代から七〇年代の終わりにかけての二〇年近くの間に達成した我が国の技術水準、それを支える科学の発展と、製品を実際に国際的な市場に売っていく経済力のたくましさ、といったものを痛感しました。二〇年前には、日本は先進国の科学技術に学びながら、ようやく国際経済の仲間入りをしたばかりでしたが、今ではすべてがフルスイングで回転しているという感じです。

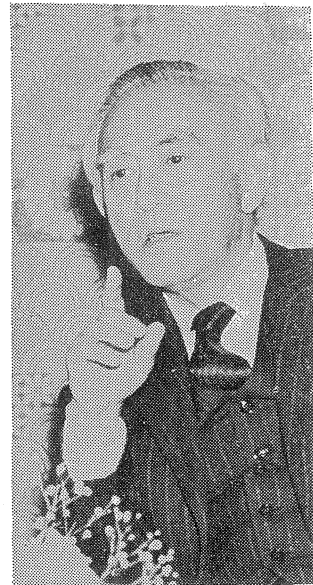
この間にアメリカはどうかと言えば、最近、非常にイノベーションの力が弱っています。これはアメリカ経済の衰退とも無関係じゃない。企業は半期半期のバランスシートに示ばられているために、長期計画をまず敷いて、その上で実現しなければならぬような技術革新の路線をとり得ない。経済が衰退しているから財政収入もよくない。かつてNASAにみられたような、政府のお金で各企業について、バランスシートに拘束されずに長期的な研究ができたため、おびただしい新しいイノベーションがでてきた、という状況がなくなっていました。逆に日本の方は、少なくともアメリカから見ていると、日本人が果たして正確に自覚しているかどうか分からないような活力がある。かつて我々の手本であり教師であったはずのアメリカやヨーロッパは——依然として

学ぶべきものが多々あるとは思いますが、少なくとも教師として、あるいは手本としての背文が、相対的にだいぶ低くなってきた。そしてある分野、例えば自動車などは明らかに日本製の車の方が優れている。自動車というコンセプトを実現したのはアメリカ人ですが、これを洗練させ、いろんな意味で消費者にとって一番使いやすくて経済的な運搬手段にしまったのは、日本人です。ですから、私どもは知ってか知らないでか分かりませんが、模倣の時代を終えて、好むと好まざるとにかかわらず、独創の時代に押し出されつつあると思います。そのための活力ははじけ返るぐらいある。ただ、この活力を今までのように経済発展の分野だけに限定しておいて、いったいこれから国が立ちゆくのかな、という心配はありますね。

宮野 国際的貢献のみち

川上 私はよほど努力しないと、模倣から独創にはいかないと思います。

私がなぜ独創力を重視するかと言うと、古今東西の歴



史をみても、結局、独創力と活力の盛んな国は興り、その陳腐化とともに国も衰退すると言えらると思うんです。今は生産技術が高く維持され、経済的にも比較的うまくいっているで、その面で日本人が安心して切っているようにも感じられるけれど、とんでもないことです。このような時期にこそ、しっかりした独創力をつけるべきではないでしょうか。

実は私も、一昨年の秋に、アメリカのナショナル・アカデミー・オブ・エンジニアリングのアニエル・ミードティンに行ってきましたが、その時にあるアメリカ人が、「日本人は我々が発明した自動車とかカラーテレビなどを取り上げて、大変うまく量産して我々の国に売り込んできている。そして失業者を沢山つくったり、経済

摩擦を起こしている。とんでもない国だ。」というようなことを言っているわけです。EC諸国もそうですが、アメリカという国は独創力といいますが、発明に対しては日本と非常に考え方が違うんです。そういう点で、今の話などは、日本人がもっと真剣に受けとめないといけないことじゃないかと思えますね。

江藤 私も一年間の滞米中に、日米関係が、今後せいぜい貿易のアンバランスの問題程度のきしみで続いている、というのは希望的観測に過ぎないと痛感して帰ってきました。やはりアメリカの中には、日本に対する非常ないら立ちというか、警戒心のようなものがよみがえりつつあると思います。

最近、アメリカで「將軍」という大衆小説が映画化され、大変な評判になっていますが、あれは、今から三十五年前にアメリカ人が持っていた日本のイメージを、戦国時代の末期から徳川時代の初期と思われる時代に移しただけの小説なのです。我々は戦後三五年間、日本を正しく理解してもらおうと、様々な努力をしてきたと思いますが、その挙句が、彼らのパーセプションは一回りして昔にもどってしまった。あの中には、野蠻で好色で、およそ西洋人とはもの考え方の違う日本人の虚像がどぎつく描かれていて、それがアメリカの大衆の中に眠ってい

る原日本像ともいうべきものにびったり合致したのだと考えられます。ですから、どんな理由にしろ日本に関心が集まるのはいいことだ、と言っている人もいるようですが、私は、あれはやはり憂うべき傾向だと思っています。

ただ、これまでのところは、後進国だった日本が、先進国に早く追いつくために、独創的なものの開発に多くの投資をするより、ある程度先進国で試みられているものを学んで、それを洗練させて伸ばしていく方が、経済効率の上からでもいいと考えたのは、ごく自然なことだったと思います。しかし、これからは先進諸国が技術情報を、もう売ってくれない。だから、いやでも自分の頭で考えなければならなくなると思えますね。

その場合、研究開発に対する国家あるいは民間の投資の在り方が問題で、息が長く、総花的でなく、選別的・集中的に行われることが必要だろうと思います。

川上 私は、かなり悲観的な見方をしている。

私も二〇年ほど前に、文部省の在外研究で一年間アメリカに行ったんですが、アメリカの代表的な三大学を訪問し、その大学の工学部の概要を聞こうとすると、いずれの大学も、まず我が大学はノーベル賞受賞者がいる、ということから話が始まる。とにかく、大学の意識が日本とは全然違うんだな、という印象を受けたものです。

湯川さんがノーベル賞を取ったというので、アメリカなどでもそれに対しては高い評価をしていましたが、一般的には、日本人が書く論文は二番せんじ三番せんじのものが多く、オリジナリティのあるものはほとんどないと言って、その当時からあまり良い評価を与えていなかったようです。

とにかく、日本全体にノーベル賞を取ろうというような雰囲気がない。大学には、新しい学問を創り出すのが大学であり、大学の研究者であるという雰囲気はほとんどないように思うし、学界も、欧米の学問を紹介するだけで、自分で学問を創り出すという意識があまりなかったんじゃないかと思う。これでは学問は少しも進歩しない。

その原因がどこにあるかと言うと、日本にはエデュケーションというものが無い。エデュケーションを教育と訳したのは大誤訳だと言った人がおりますが、エデュケーションというのは能力を引き出すことで、教育とは詰め込むことなんです。こういうことを全く意識していない。

先日、ケンブリッジの教授が私の大学に来た時に聞いたんです

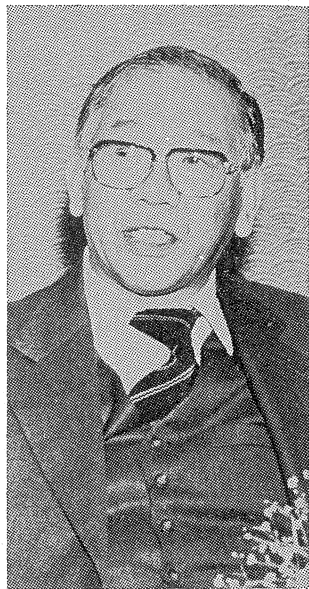


が、ケンブリッジでは、三時間の入試のうち一時間半は学力のことをやり、あとの一時間半は、その学生が本当に考える力があるか、これから伸びるか、といったことを問答でやるそうです。そういった力を確かめるのは問答以外にないと昔から言われているんですね。

日本は全部ペーパーテストで、詰め込まれた知識中心に入試をする。だから、独創性のない秀才ばかりが大学に集まりがちである。私はものを覚える能力と、自分で考える能力とは相反するというか、両立しないんじゃないかと思う。例えばアインシュタインのような人にいろんなことを聞いても、『私は知らん』と言うと思う。本当に考える力がある人というのは、それほどもの知りじゃないと思う。そういう点で、私は今の日本の状態は極めて悲観的なものだと思います。

子どもの能力を引き出す教育

宮野 独創性を発揮するためには、川上先生のおっしゃったエデュケート——子供たちの持っている能力を引き出していくことが、非常に大事だろうと思います。このことは低学年の段階から考えていかなければならないことだと思いますが、具体的にどうしたら良いとお考え



ます。その結果だめになってしまうのは、独創的ではない。疎外されるにもかかわらず自分の独創性を伸ばしていく人間が、独創的な仕事をするんだと思います。ところが、日本人の考え方の中には、独創性をとるか、あるいは周囲から疎外されない方をとるかと言うとき、後者をとらなければならない、という価値観があまりにも強く根づきすぎている。どこかではみ出した人間が、はみ出していることの栄光と悲惨をかみしめながら、自分の能力を伸ばしていけるような体制が必要だと思うのです。

それから、とかく我々は、国際化とか独創性というのはプラスアルファを身につけることだと思いがちですが、これはとんでもない誤解だと思います。独創性とか国際性というのは、無限に獲得し続けることでは決して

でしょうか。

江藤 大変難しい問題ですが、文部省は歴史の古い役所で、「学制」の精神に則り、レベルの高い近代普通教育を全国津々浦々まで普及させた功績があると思います。これは日本の世界に誇るアチーブメントだと思いますが、同時に、普通教育の画一化というものが浸透してしまっ

た。例えば、今二〇万人を超える日本人が海外で生活しているわけですが、そこにでてくるのが海外帰国子女の教育の問題です。画一的な対処が難しいグループが、それも何千人、何万人というオーダーで帰国する。さあ、どうしたらいいかという問題ですね。また、海外在留の子女の教育のために、文部省は海外に日本人学校をつくり、教員を派遣している。日本人学校は私立学校の体裁をとっていますが、そこでは国内の公立小・中学校に準じた教育が行われている。これは、一面から言えば親心あふれる措置とも言えますが、反面やはり恐るべき画一主義の現れとも言えます。結局、私は独創性というものは裏側があると思うのです。

独創的な人間は、結果として世の中にいられるかもしれないませんが、一〇〇人のうち仮に一人だけ独創的な人間がいれば、九九人に疎外されるに決まっていると思

い。獲得した半面、何かを決定的に失うことだと思います。だから、大多数の人からみれば、ちょっとずれた価値基準で動いているものだから、失っている面だけが見えるわけです。そういう人間の存在を許容できる、柔軟さを持った社会をどうしてつくり出すが、今後の大きな課題だろうと思います。

宮野 社会の中にはいろいろな人間がいるんだという見方が、なかなか日本人にはできにくい。そのへんを何とかしなくてはいけないということですね。

江藤 そうです。

川上 日本にも独創性のある人は現にいます。ただ、そういう人たちは、ほとんどの人が勇気がありますよ。勇気がなかったらみんなつぶされちゃう。だから、いま独創的な仕事をしておられる方は、おそらく勇気がある人ばかりが生き残って、たくましく生きているんじゃないかと思えますね。日本では特にそうじゃないでしょうか。(笑)

江藤 そうですよ。日本はグループ社会ですからね。もとをたせば私たちはみんな農民の出身で、昔から村中総出で田植えをし、草取りをする。そして取り入れが終わればお祭りをして、みんなで喜ぶ。これはやはり日本の麗しい美風で、それはそれで私は大変好きなのです

が、そういうメンタリティと、近代のとかく競争の中で生きていかなければならないという、国際、国内環境との調和が、なかなか難しいことだと思えますね。

川上 考える力をつける一つの具体的な方策として上智大学のピタウ学長が興味あることを書いているのを読んだことがあるんです。ピタウさんは教育ママを相手にして、「あなた方はお子さんが学校から帰ってきた時に、『今日は何点取ってきたか?』と聞くんじゃないですか。そういうことを聞いてはいけません。今日は先生をやり込めたかどうかというのを聞きなさい。」と言っているんです。私は非常に良いことだと思いましたね。点数なんか問題じゃなくて、先生をやり込めたかどうか、そういうことを重点的にやれば、非常に自主性がつくんじゃないかと思うし、先生もやり込められたら、自分より能力のある子が出てきたと、本当は喜ぶべきだと思いますね。

江藤 やり込められて喜ぶような先生は本当に偉い先生だと思えますが、なかなかそこまで偉くなれない。先生の自己教育だってまだまだできていないんですよ。

国際化——自分の国を知ること大切

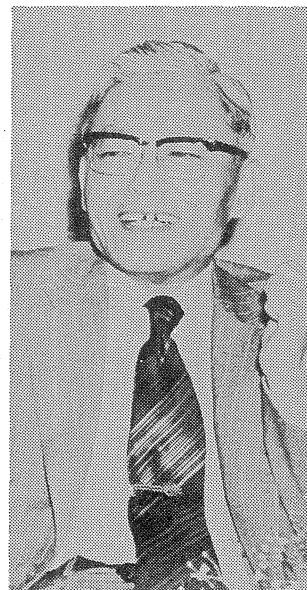
なんだな、と尊敬すると思えます。

戦前、長く駐日フランス大使をされており、詩人、劇作家でもあるポール・クロデルが、帰国後、彼とともに二十世紀フランス詩壇の最大の巨人と称されたポール・ヴァレリーに、『私がどうしても滅んでもらいたくない一つの民族がある。それは日本人だ。これほど太古からの興味ある文化を持つ民族を、私は他に知らない。彼らの最近の大発展は、私には少しも不思議ではない……。彼らは貧乏だ。しかし高貴だ (ils sont pauvres, mais nobles)』と語ったということですが、やはり、昔の言葉で言えば「大和魂」とか、「武士道精神」とか、そういった何か一本筋の通っている人間が、国際的にも尊敬されると思えますね。日本人であることを失った人は、国際的にも通用しませんよ。

またこういう話があります。日本のある会社が外国に工場を設けた時、その工場長としては、外国語は二の次として、経営能力のある人を派遣して成功したそうです。これは確かに遠見ですね。外国語は現地の人に補ってもらえばいいわけですから。

宮野 日本の文化というものも、どういうところが本当の良ところなのか、いろいろ議論があるだろうと思いますが、戦後、我が国の社会がアメリカナイズされ、

宮野 教育界でも、これからの国際化の時代には、国際的視野で物事をみるということが大切だということとで、国際理解教育ということもやっていますが、他国をよく知るためには逆に自分の国をよく知ることも大事なのではないでしょうか。



江藤 全くそのとおりだと思います。国際化するということとは、実は自国の伝統に目覚めるということなんです。自国の伝統に目覚めない国際人は、実は国籍喪失者にすぎません。そういう人が沢山できては仕方がないと思います。

川上 私も全く同感です。日本人の魂を失った人は国際的には通用しないと思う。やはり日本人の特色があつてこそ、外国の人も、日本人というのは素晴らしい人間

悪い意味での大衆化社会で、何かコスモポリタン的ななったんではないかと思えます。これはしかし日本だけではなくて、ヨーロッパ諸国でもそういう状況が多いようですが、いずれにしても、我が国の伝統というものを、我々がどのように受け継いでいってほしいかというのは、大きな問題だと思います。ところが、日本人よりも外国の識者の方が日本をよく理解してくれているということもあるようですが……。

江藤 アメリカ化というような現象は、ヨーロッパでもそうだと思いますが、日本とドイツの場合はやはり特別だろうと思います。第二次大戦の敗戦国であるために、伝統的な文化に対する自信を失いがちだということは、どうしても否定しがたいことです。それでもドイツに比べたら、日本の方がまだいいと思えます。なかなか優れた短歌や俳句が投稿されて、毎週のように新聞に出ているのは、やはり日本人が伝統的な文化に対して愛着を持ち続けている一つの証拠だと思います。

ただ、外国人の方が、よく知っているかどうかについては問題があると思えます。研究者として専門に勉強している人については、その分野ではそう言えるかもしれないが、一般の人が日本の良さをよく知っていると考えるのは、あまり正確ではないと思います。

独創性

小さい時からのメンタル・トレーニングを…川上
生涯教育の展開で画一教育の弊害を是正…江藤

宮野 文部省では、子供たちを指導する立場にある教員に国際的な感覚を身につけてもらおうと、教員の海外派遣ということもやっております。期間はわずかですが、行った先生方は、一様に日本というものを再発見し、日本について自信を持って帰ってきていますね。国際化、国際化と言っても、やはり何かこうした刺激が必要だと思えますね。

川上 それは非常にいいことですよ。ただ、せっかく外国へ行ったのならば、どうして外国人が独創的な仕事ができるのに、日本人ができないのかというのを、なぜもっと深く追求してこないのか、それが非常に残念です。

江藤 日本の場合、江戸時代の終わりまでは、学問は儒学が中心でした。明治の文明開化と同時にそれを西洋的な学問体系に切り換えたわけで、洋学を何とか吸収して自分のものにしようと、涙ぐましい努力を続けてきた。これはいわば外国語を習得する過程に似ている。日本人にとって学問とは、ごく最近まで外国語のようなものだったとも言えます。しかし、この習得過程で大体一〇〇年かかってしまった。

そういうった、小さい時からのメンタル・トレーニング——外国じゃそんなことは当たり前だと思っているから意識していないのでしょうか——が大事だと思えますね。大学へ行ってからではもう遅いと思っています。

宮野 そうですね。

江藤 文化の型はそう簡単に変えられるものではないと思いますが、個性を伸ばす教育といえるでしょうか、画一的でない教育ができればいいのではないかと思いますね。落ちこぼれをなくすことも大事ですが、その一方で伸びるものをどんどん伸ばしてやろうというのが、正しい活力のある人間社会の在り方ではないでしょうか。

川上 日本にも独創性のある人はいるんですが、問題はそれをどうしたら伸ばしてやれるか、ということだと思えます。日本の社会には、戦後特に、そういうものの考え方をする人を伸ばしてやるといふ、余裕というか寛容さがなくなっているのではないのでしょうか。

江藤 戦後の平等主義が、誤る画一主義になってしまったんですね。アカデミック・スタンダードだけで人間が評価されるというのがそもそもおかしいんです。

それと、日本では昔から学校教育に対する期待が大きく、学校にさえやっておけばなんとかしてくれるだろう、という考えが非常に強い。いかに世界に冠たる我が

やはり独創的な学問とは、比喩的に言えば、自分の言葉で表現した学問、自分の言葉で考え抜いた体系、ということだろうと思います。そういう点でも、日本人は今や自国語で学問を表現できる段階に到達しつつあると思う。あとは何か一つ刺激が必要なのだろうと思います。その刺激をどのようにして与えていくかというところに、教育行政の要諦があるのではないのでしょうか。

川上 私は、独創的な精神を創り出すには、学校教育以前の根本的な問題があると思っています。

例えば、母親が子供を持つてお乳が少し足りないという時に、日本人だと母親の方が自分でお乳をなでて、お乳を出すようにする。ところが、イギリスでもアメリカでも、大部分の母親は、子供のほったをたをつねって、子供が自分から吸うように刺激するそうなんです。

それから、オックスフォードに行っている私の教え子が手紙をくれたんですが、その中で、ロンドンのおもちゃは、日本のおもちゃのようにスイッチを入れるとガラガラ動くようなものじゃなくて、子供が考えながら遊ぶおもちゃだ、といってびっくりしていました。そこで、知り合いのおもちゃ屋に、日本でも考えるおもちゃを作ったかどうかと言ったら、作ってるけれど日本じゃ売れない。みんな外国に売ってるんだ、と言うんですよ。(笑)

日本の普通教育といえども限度があるし、いわんや中等教育、高等教育になれば、学校の成し得ることはごく限られているということをもっと国民に徹底させるべきだと思えますね。

そういう点で、現在中央教育審議会では、学習機会を多様化することによって学校で勉強する時期をなるべくフレキシブルにし、国民の一人ひとりが、生涯を通じて学習できるようにということで、生涯教育について審議を進めています。私も審議に参加させていただいているのですが、これが展開されることによって、画一主義的な教育はある程度是正できるのではないかと期待しています。

川上 とにかくこれからは、学問的にも日本人が新しい考えを世界に供給し、また新しいイノベーションを日本人が考え出して新規な製品を売ったり特許を売ったりして、世界の人々に喜んでもらう。そして戦争は絶対にしませんということであれば、日本は国際的に信頼され、尊敬されるんではないかと思えます。日本が今後生き残っていくためにはそれ以外に道はないと思います。これを実現するためには、教育全般にわたっての見直しが必要ではないでしょうか。

宮野 いろいろと貴重なご意見をお聞かせいただきまして、大変ありがとうございます。

須田国太郎 歩む鷲

須田国太郎は旧制第三高等学校から京都帝国大学哲学科に入り、一九一六年美学美術史専攻を卒業した。一九一九年同大学の大学院を中退して渡欧するが、はじめインドに立寄り、数カ月かけてアジャンタなどを訪れ、それからロンドン、パリを素通りしてスペインのマドリッドに直行、ここに定住した。美術学校ではなく京都帝国大学哲学科に学んだことや、パリではなくマドリッドを選んだところに、彼の芸術に対する姿勢をうかがうことができる。

須田の考えによれば、近代日本の油絵は西洋の近代絵画のひとつの形を選択、模倣することから出発しており、それは日本の油絵の発展であるより、他国の油絵のある発展過程の一節をうけついただけでしかないのである。したがって日本の油絵はつねに断片で、つねに自己の根を持っていない。いわば瓶に挿した切花のようなものである。彼が画家としての修業の過程から特異な道を選んだのは、性急に花だけを切取るのではなく、根ごと移植しようとする強い意志の現われであった。帰国後の須田は東西の美感覚の融合というテーマを設定して重厚な歩みをつづけたが、大樹の下で大きく羽根を広げる鷲を描いたこの絵は、彼が自らに課していた課題に対する解答でもあった。

(岩崎 吉一)

編集後記

▽新年号は、文教の特定分野に限定した特集とはせずに、文教全般を取り上げ、その現状と抱える課題を、できるだけ平易な形で提供するように努めました。

▽てい談「これからの教育——世界の存の日本」では、数多くの国々との依存関係が強く、したがって国際協調を重視する観点から国の諸施策に求められる我が国が、今後の発展、国際的な貢献を果たすうえで考えなければならぬ教育上の課題は何かを中心に論じていただきました。

▽てい談を総論とするならば「私の見る我が国の文教の姿」は、いわば各論とも言えるもので、複雑多岐な内容を包含する分野を六人の先生に御担当いただき、限られた紙数の中で、当該分野の水準、特質、課題などについて御執筆いただきました。

▽また、資料は、統計数値によって文教の姿を鳥かんしたのですが、これについては、いずれ公刊される白書によってその詳細を御報告する予定です。

▽次号は、「青少年教育施設」を特集します。

本年も引き続き、本誌の御購読をお願い申し上げます。

(企画室)

MEJ 61 月刊 「文部時報」 1 月号 第1244号

文 部 省

昭和56年1月5日 印刷
昭和56年1月10日 発行

著作権
所 有

発行所 株式会社 きょうせい

本 社 東京都中央区銀座7丁目4番12号
(郵便番号 104)

(営業所) 東京都新宿区西五軒町52番地
(郵便番号 162)

電話 東京 (268) 2141 (代表)

振替口座 東京 9—161番

印刷所 株式会社 行政学会印刷所

定価 200円 (千33円)

年間購読料 2400円 (千共)

・ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます
・なお、購読のお申し込みは直接営業所またはよりの書店にお願いします